様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６２９
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００６５３

研究課題名（和文）英国モダニズムにおける反心理学の系譜に関する学際的かつ国際的研究

研究課題名（英文）An International and Interdisciplinary Study of 'Anti-Psychology' in British Modernism

研究代表者
遠藤　不比人（Endo, Fuhito）

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：３０２４８９９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,120,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「反心理学」という論点から、英国モダニズムを近代心理学の歴史に位置付け、当時の心理学言説とモダニズム文学・文化との対抗関係、身体性と「もの」に関する新たな理論の整理、プリミテヴィズム美学の再解釈、反植民地主義の政治理論と運動、といったテーマを横断的・総合的につなぐ文化史の枠組みを構築した。共通する目的は、「心」という定義上不可視のものを可視化する試みである近代心理学の根源的な不可能性を暴露するために、独特の物質（もの）／身体性を露出した言語として、モダニズムを再歴史化することである。ペンシルベニア大学やコーネル大学などの研究者と連携し、研究の国際性と学際性を獲得することもできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、心理学との親和性あるいは心理学批判という点からはimpersonalityということが強調されてきた従前のモダニズム研究に介入するため、反視覚としての「もの」「触覚」という視点から、「反心理学」「反美学」という新たな概念を構築することを目指した。それと同時に、この歴史化の試みにおいて、近代心理学を専門とする歴史家と共同研究をすることにより、文学と歴史研究の学際的な架橋を試みた。このように英国モダニズムを近代心理学史に文脈化することで、従来にはない文化史の可能性を創り出すことができたことに主たる意義がある。特に「もの理論 Thing Theory」を視野に入れたことに独自性がある。

研究成果の概要（英文）：From the perspective of 'anti-psychology,' this study has situated British modernism within the history of modern psychology and constructed a theoretical and historical framework that links themes such as the opposition between psychological discourses of the period and modernist literature and culture, the organisation of new theories of corporeality and 'things,' the reinterpretation of primitivist aesthetics, political theories and movements of anti-colonialism, and the cross-cutting and cultural-historical frameworks that comprehensively link them. The common aim has been to rehistoricise modernism as a language that reveals a distinctive material (thing)/bodyhood in order to expose the fundamental impossibility of modern psychology as an attempt to make visible what is by definition invisible: 'mind'. Collaboration with researchers at the University of Pennsylvania and Cornell University has also allowed the research to take on an international and interdisciplinary character.

研究分野：英文学

キーワード：反心理学　モダニズム　近代心理学　反美学　触覚　もの理論　半植民主義　不可視性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、遠藤不比人が研究代表であった科学研究費基盤 B「英国モダニズムの情動空間に関する総合的かつ国際的研究」（平成２５年～２８年度）で行われた共同研究から派生、発展したものである。事実、上記科研費の最終年度に「反心理学」をテーマとした国際会議 Psychic Modernity: Critical Approaches to the Psychological を成蹊大学で開催した。その際の議論において本研究の主要テーマの一部が萌芽的に問題となった。この会議にはロンドン大学の心理学の歴史の研究者が複数参加し、本研究においても目指されている英文学研究と歴史研究の学際的な架橋を試みた。前述の科研費による研究は、近代文学と心理学が制度化、カテゴリー化した「感情 feeling」を逸脱したものとして「情動 affect」を定義しており、それゆえに本研究の主題である「反心理学」という概念は、前回の研究を踏まえながらも、より広範で詳細な歴史的文脈にまで議論を拡大することを可能にした。

前回も研究代表者であった遠藤は、上記の研究成果の一つとして単著『情動とモダニティ―英米文学/精神分析/批評理論』を上梓したが、そこにおいて「反心理学」としての「ポスト印象主義」あるいは精神分析という視点を試験的に提出しており、本研究はその議論をより組織的に実践することを目指している。田尻芳樹は、一貫してモダニズムにおける「身体」が帯びる情動性の研究をしてきたが、遠藤による精神分析的な議論と交錯することにより「不気味なもの」を着眼点とした「もの理論」を志向するに至った。中井亜佐子は、植民地における革命的身体の情動性に関してポストコロニアル批評を実践してきたが、「反心理学」としてのプリミティヴィズムという視点を獲得し、その延長線上にモダニズムの逆説的な歴史性（前近代性のモダニティ）を着想するに至った。さらにそこにフェミニズム的な可能性を模索することになった。秦邦生は、モダニズムにおける映像テクストに造詣が深いが、「反心理学」という論点を得て、その視覚性が抑圧する「もの」を考察するに至った。これらが研究開始当時の背景となる。

２．研究の目的

本研究は「反心理学」という中心的な論点から、英国モダニズムを近代心理学の歴史に位置付けながら、（１）当時の心理学言説とモダニズム文学・文化との対抗関係、（２）身体性と「もの」に関する新たな理論の整理、（３）プリミテヴィズム美学の再解釈と歴史化、（４）反植民地主義の政治的理論と運動、といった多様なテーマを横断的・総合的につなぐ文化史の枠組みを構築することを試みた。共通する目的は、「心」という定義上不可視のものを可視化する試みである近代心理学の根源的な不可能性を暴露するために、独特の物質（もの）／身体性を露出した言語として、モダニズムを再歴史化することである。フィラデルフィア大学やコーネル大学の研究者たちと緊密に連携し、研究の国際性と学際性を獲得することも同時に目指した。

３．研究の方法

本研究は組織的な遂行をするために、研究代表者（遠藤）、研究分担者（中井、田尻、秦）、海外の研究協力者（コーネル大学教授・ジョージ・マカーリ、ペンシルベニア大学教授・ジャン＝ミッシェル・ラバテ）から組織された。マカーリ教授は、近代心理学および精神分析の歴

史に関する権威である。ラバテ教授は、モダニズム文学と精神分析の関連についての権威である。

研究分担者を含めた役割分担を以下のように組織することによって、研究の組織的な遂行を目指した。

（１） 心理学的言説へのモダニズムの介入（遠藤、田尻）

この課題では、初年度に国際会議を開催するべく上記マカーリを招聘し、英文学研究と歴史研究の学際的な架橋の実践の場とした。遠藤と田尻はそれぞれ Woolf と Beckett らによるそれらの心理学との交渉、介入を論じ、特に田尻はこの論点を現代に Kazuo Ishiguro にまで拡大した。招聘されたマカーリ教授は、近代心理学の不可能性という議論をモダニズムに文脈化することに貢献した。

（２）新たな「もの」理論の構築（田尻、秦）

この課題では、フロイトの「不気味なもの」という精神分析的概念を「反心理学」という点からモダニズムにおいて再解釈し、理論と歴史という対立を無効にする研究を目指す。精神分析理論の権威である上記ラバテ教授を招聘して国際会議を開催し、このテーマの深化を図った。特に「もの」をめぐる議論には、現象学による心理学批判という哲学的視点が必要なので、当該文献の選定、国際会議の理論的前提の構築、および事務一般は、田尻が担当した。秦は、理論構築における視覚とそれが抑圧する「触覚」「もの」性について考察した。

（３）ポスト印象主義におけるプリミティヴィズムの再解釈（秦、遠藤、中井）

この課題では、Fredric Jameson の Conrad 解釈を踏まえ、文学のみならず絵画を読解対象とし、美学上の用語である「印象主義」「ポスト印象主義」の概念を「反心理学」「反美学」という論点から再定義をした。秦は絵画、映画など映像テクストの収集と分析を主導的に行い、遠藤は Lawrence、R. Fry、Woolf の美学理論の比較検討、中井は Conrad を「反心理学」という点から再検討し、ポストコロニアル批評の限界を吟味した。このテーマに関しては、国際会議に招聘した下記のオックスフォード大学教授であるローラ・マーカスの「リズム」に関する議論が大きな貢献をした。

（４）植民地におけるモダニスト的身体のマルクス主義的な理論化（中井、秦、遠藤）

この課題では、特に C. L. R. James に関して情動という論点から先駆的な業績がある中井が中心となり「ハイチ革命」をめぐる問題系を「反心理学」という点から再考察し、新たなマルクス主義理論の可能性を探った。秦は、Jameson のマルクス主義的ユートピア論の翻訳者であるので、この知見を生かし中井の議論を Jameson 流の弁証法＝歴史化という線から補強した。遠藤は、さらにそこに Jeffrey Mehlman（1977）における「不気味な唯物論」というその後ほとんど議論されていない論点を接続し、革命的かつ反心理学的な身体をめぐる歴史記述を洗練させた。

４．研究成果

2018 年度の研究実績で特筆すべき点は、コーネル大学ジョージ・マカーリ教授を招聘し、成蹊大学 (2019 年 3 月 11 日)と京都大学(2019 年 3 月 26 日)においてワークショップを開催したことである。マカーリ教授は著書 *Revolution in Mind: The Creation of Psychoanalysis* において、フロイトの精神分析が既存の近代心理学を巧みに引用しながらそれを独自に編集することでその言説的布置から逸脱し、いかなる形でオリジナルの「心」をめぐる科学へと発展していったのかを詳述しており、 その議論は精神分析を「近代心理学理性批判」として再読する試みである。このテーマは本研究課題と直結しており、マカーリ教授は研究協力者として来日す

ることになった。その結果、成蹊大学と京都大学でのワークショップにおいてマカーリ教授と「反心理学」としての精神分析について多岐にわたる議論をすることができた。ちなみにこの著作は研究代表の遠藤による邦訳が、みすず書房より出版された。さらに研究分担者の中井が、2018年9月29日にMax Saundersロンドン大学教授を招聘し、当該テーマと歴史記述をめぐるワークショップを一橋大学で開催し活発な議論をすることができた。二番目に強調すべきは、海外での研究発表である。本研究課題の主要テーマは英国モダニズムをめぐるものだが、この主題に関して新たにModernist Studies in Asia (MSIA) が発足した。この第一回の大会が香港のThe Education University of Hong Kongにて2018年6月15日に開催された。この学会において、研究代表の遠藤と分担研究者の秦が「反心理学」と英国モダニズムをめぐって口頭発表を行った。研究分担者の田尻は、Becketを中心に今年度3回ほど海外の国際会議で研究発表を行った。

2019年度は、9月に開催した上記MSIAの東京での国際会議の基調講演のためオックスフォード大学のローラ・マーカス教授を招聘したが、マーカス教授の近刊書のテーマである「モダニズムとリズム」の内容を事前に知ることができる特権的な機会となった。講演後の質疑応答において、リズムという知覚横断的で表象が困難な心的強度における「反心理学性」という議論をすることができたことは、この科研費の主題的関心からして極めて重要な意義を帯びるものであった。また、マーカス教授からは、研究代表の遠藤のこの会議における口頭発表について、これも非常に貴重なコメントを頂戴し、当該研究の進展にとって不可欠な視点を獲得できたことも付言しておく。マーカス教授も、この2日にわたる国際会議のレヴェルの高さに感銘を受け、初来日であったのだが、今後ともこの科研費のメンバーとの研究上の相互交流を約束して帰国されたのだが、その後急逝されたことは甚だ残念なことである。またこの年度の3月には、ペンシルベニア大学のジャン=ミッシェル・ラバテ教授を招聘し、成蹊大学においてモダニズム文学と精神分析に関する国際会議を開催することができた。精神分析は、この研究課題において「反心理学」を代表する言説となっている。まずはラバテ教授が当該テーマに関する基調講演を行い、それへの応答がなされ、その後ラカン派精神分析、精神分析史、イギリス文学を研究する研究者が口頭発表をし、ラバテ教授から鋭利なコメントを頂戴したことは大きな意味があった。本来の予定であれば、そのあと京都大学において、もう一つの会議が開催されるはずであったが、コロナ・ウイルスの感染者急増により米国への帰国が困難になる危惧から、京都での会議を断念せざるを得なかったことは残念であった。コロナ禍のためこの年度で執行不能となった予算を2021年度に繰越し、ラバテ教授によるオンラインの講演を2021年6月に実施したことも付言する。

2020年度はパンデミックのために予定していた対面による国際会議の開催を断念して、代替策として複数のオンラインでのワークショップを実施して国内外の研究者との学術的交流を維持することに努めた。しかし、当初計画していた規模には達することはできなかった。 遠藤は、共同研究の遂行のため統括的な役割を演じながら、当該分野である「反心理学」について、その否定性あるいは表象不能性という観点から考察し、特に「情動」の歴史的かつ政治的意義について議論を試みた。具体的な研究対象は、Paul de Man, Oscar Wilde, Raymond Williams, Virginia Woolf, Melanie Kleinなどである。 田尻は、当該テーマであるモダニズムにおける反心理学の系譜を、現代のKazuo Ishiguroにまで接続しながら、彼の作品における「日本」という要素について探究をし、研究成果を共編著として出版した。また、当該主題を

三島由紀夫にまで拡大して、本研究の学際性を高めることを試みた。 中井は、当該分野を、モダニズム文学におけるヒストリオグラフィとマニフェスト性において再解釈しながら、Joseph Conrad, Virginia Woolf, C. L. R. James のテクストを中心に研究し、単著として出版した。この研究は、当該分野のラディカルな政治的可能性について特に注目をしたものである。 秦は、田尻と協力して、Kazuo Ishiguro についての研究書を共編し、Ishiguro における「自己欺瞞」の語りが、Marcel Proust と黒澤明からの影響を混淆したところに成立していることを論証した。また、これと並行して日本語によるワークショップを 1 回、英語によるセミナーを 2 回などをオンラインで開催することに尽力をした。

2021 年度もパンデミックの終息を予測することができなかったため、当初予定していた国際会議の開催や海外出張(学会発表や資料調査)を断念し、おもにオンラインでのワークショップなどを実施した。遠藤は、全体の研究活動を統括しながら、昨年度に引き続き、研究テーマである「反心理学」について「情動」という観点から考察し、その政治的意義などについて探究した。この文脈で、精神分析とマルクス主義の意義について再考察を試みた。研究対象は、Raymond Williams, Virginia Woolf, Sigmund Freud, Melanie Klein, Joan Riviere などである。田尻も、昨年度に引き続き、Kazuo Ishiguro、三島由紀夫にまで当該テーマを拡張し、その成果として共編著である『三島由紀夫小百科』および、共訳書レベッカ・ウォーコウィッツ『生まれつき翻訳―世界文学時代の現代小説』を刊行するなどした。当該分野で特に「世界文学」と「翻訳」という主題について考察を深めた。中井は、Virginia Woolf の 1930 年代の思想と 1970 年代の「家事労働に賃金を」運動との関係を調査し、*Three Guineas* をマルクス主義フェミニズムの観点から再読する英語論文を刊行した。これは査読付きの海外の学術雑誌に掲載された。中井は、このように昨年度と同様、当該テーマに潜在するラディカルな政治性を議論することに努めた。秦は、まず George Orwell『一九八四年』についての編著を出版し、その後、20 世紀後半に活躍したイギリスの文化批評家 Raymond Williams の著作『オーウェル』を翻訳出版し、批評の社会的役割や ユートピア/ディストピアという文学形式の理解について長文の附論を掲載した。これも当該テーマの社会主義的可能性を問うものである。パンデミックゆえに繰り越した資金により、2023 年 3 月に成蹊大学にケンブリッジ大学のアンドリアス・ゾマー博士を招聘し、国際会議を開催したことを付言する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Fuhito Endo	４．巻 25
２．論文標題 2.Affect and Socialist Community: Raymond Williams’ _The Border Country_ Revisited	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Seikei Review of English Studies	６．最初と最後の頁 35 44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Asako Nakai	４．巻 1
２．論文標題 Materialism, Autonomy, Intersectionality: Revisiting Virginia Woolf through the Wages for Housework Perspective	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Feminist Theory	６．最初と最後の頁 146 165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/14647001211062720	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Fuhito Endo	４．巻 24
２．論文標題 Something Ontological beyond the Psychological: De Man and Karatani Reconsidered	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Seikei Review of English Studies	６．最初と最後の頁 23 30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Fuhito Endo	４．巻 19
２．論文標題 Modernism as Anti-Modernity: Oscar Wilde’s Negative Materialism	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Oscar Wilde Study	６．最初と最後の頁 43 59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田尻芳樹	4．巻 27
2．論文標題 『鏡子の家』における日常性の問題」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 言語・情報・テクスト	6．最初と最後の頁 71 89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00080116	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Fuhito Endo	4．巻 24
2．論文標題 Something Ontological beyond the Psychological: De Man and Karatani Reconsidered	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Seikei Review of English Studies	6．最初と最後の頁 24 30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中井亜佐子	4．巻 1145
2．論文標題 旅する理論―エドワード・サイードはフーコーをどう読んだか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 109 123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中井亜佐子	4．巻 14
2．論文標題 小説という名の箱舟のなかで―『ロビンソン・クルーソー』と『フォー』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 言語社会	6．最初と最後の頁 129 145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 秦邦生	4．巻 13
2．論文標題 「今」読み返すジェイン・オースティン『ノーサンガー・アビー』と読み方のレッスンの継承	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ジェイン・オースティン研究	6．最初と最後の頁 81 94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Fuhito Endo	4．巻 23
2．論文標題 Patricide of Monotheism/MetaPsychology: Freud's Historiography of Transcendental Negativity	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Seikei Review of English	6．最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 遠藤不比人	4．巻 13
2．論文標題 顔と表層をめぐる脱修辞学、あるいは、ポール・ド・マンの反心理学	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語社会（一橋大学大学院言語社会研究科発行）	6．最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Asako Nakai	4．巻 8
2．論文標題 Fiction is History -- but Why Fiction? A Response to British Literature in Transition, 1920-1940	5．発行年 2019年
3．雑誌名 レイモンド・ウィリアムズ研究	6．最初と最後の頁 95-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計22件（うち招待講演　7件／うち国際学会　16件）

１．発表者名 遠藤不比人
２．発表標題 交錯するフロイトとクライン：モダニズム的言語における女性性をめぐって
３．学会等名 日本英文学会（招待発表）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yoshiki Tajiri
２．発表標題 Klara in the Wonderland of Emotions
３．学会等名 Kazuo Ishiguro’s Klara and the Sun: Cambridge Companion Symposium (Online)
４．発表年 2021年

１．発表者名 秦邦生
２．発表標題 カズオ・イシグロと〈始まり〉の探求
３．学会等名 成城大学大学院文学研究科主催学術講演会
４．発表年 2021年

１．発表者名 遠藤不比人
２．発表標題 情動ともの：モダニズム芸術をめぐって
３．学会等名 表象文化論学会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Fuhito Endo
２．発表標題 Affect and Cultural Production: _Border Country_ and Socialist Community
３．学会等名 Raymond Williams Society 1st Annual Conference 'Cultural Production and the Redundancy of Work: Precarity, Automation, and Critique'（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fuhito Endo
２．発表標題 The Ocean Libidinized: Yukio Mishima and the Cold War
３．学会等名 International Conference on the Aesthetic Mechanisms of Ocean Representations in British, American, and Asian Contexts（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fuhito Endo
２．発表標題 A Modernist Critique of Modernity: Materiality of the Invisible in British and Japanese Modern Art
３．学会等名 Modernism and Multiple Temporalities: The Second Annual International Conference of the Modernist Studies in Asia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fuhito Endo
２．発表標題 Something Traumatic beyond the Psychological: Karatani and de Man Reconsidered
３．学会等名 Workshop on the End of Modern Literature（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 遠藤不比人
２．発表標題 反近代としての近代主義　オスカー・ワイルドにおける表象をめぐる問題系
３．学会等名 オスカー・ワイルド協会第44回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Asako Nakai
２．発表標題 The Convenience Store: Urban Workstyle Today and Tomorrow
３．学会等名 Raymond Williams Society First Annual Conference “Cultural Production and the Redundancy of Work: Precarity, Automation, Critique,”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Asako Nakai
２．発表標題 Timeless Workers of the World: Modernist Temporal Imagination and the Wages for Housework Campaign
３．学会等名 The Second Annual International Conference of the Modernist Studies in Asia Network (MSIA) “Modernism and Multiple Temporalities"（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中井亜佐子
２．発表標題 近代文学の終わり？
３．学会等名 国際シンポジウム「近代文学の終り」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshiki Tajiri
２．発表標題 Virginia Woolf’s Existential Concern with Non-Human Space’. Modernism and Multiple Temporalities
３．学会等名 The Second Annual International Conference of the Modernist Studies in Asia Network (MSIA) “Modernism and Multiple Temporalities"（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshiki Tajiri
２．発表標題 Virginia Woolf and the Cinematic Perception
３．学会等名 Technically Yours’ Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshiki Tajiri
２．発表標題 Art or Utilitarian Activities: Ishiguro’s Decision in an Early Plan for Never Let Me Go
３．学会等名 Twenty-First Century Perspectives on Kazuo Ishiguro（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kunio Shin
２．発表標題 Utopia’s Inhuman Temporality: H. G. Well's The Shape of Things to Come and Its Film Adaptation
３．学会等名 The Second Annual International Conference of the Modernist Studies in Asia Network (MSIA) “Modernism and Multiple Temporalities"（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fuhito Endo
２．発表標題 Empathic or Counter/Transferential Narrative: Pre/Post Freudian Language in Joseph Conrad
３．学会等名 Modernist Studies in Asia First International Conference "Modernism and Empathy: An International and Interdisciplinary Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Fuhito Endo
２．発表標題 Face or Surface Disfigured: Paul de Man, Wordsworth, and Freud
３．学会等名 Behind the Masks: Representations of the Face in Japanese and Western European Literature and Theatre from the Early Modern Period to the Present（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yoshiki Tajiri
２．発表標題 Endgame and the Everyday Life of the Nuclear Age
３．学会等名 International Conference: ‘Beckett and Technology’（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshiki Tajiri
２．発表標題 Reading J. M. Coetzee’s Essay on Erasmus: Self-Certainty and Power
３．学会等名 Giving Offense Essays on Censorship（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshiki Tajiri
２．発表標題 Reading Kojin Karatani ’ s Essay on the End of Modern Literature
３．学会等名 World Literature and Philosophies Lecture Series（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kunio Shin
２．発表標題 Abstraction, Empathy, and Mechanical Laughter in Wyndham Lewis's The Apes of God.
３．学会等名 Modernist Studies in Asia First International Conference "Modernism and Empathy"（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計9件

１．著者名 田尻芳樹他	４．発行年 2021年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 474
３．書名 三島由紀夫小百科	

１．著者名 レベッカ・ウォーコウィッツ（田尻他共訳）	４．発行年 2021年
２．出版社 松籟社	５．総ページ数 453
３．書名 生まれつき翻訳ーー世界文学時代の現代小説	

1．著者名 秦邦生他	4．発行年 2021年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 314
3．書名 ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読む ディストピアからポスト・トゥルースまで	

1．著者名 レイモンド・ウィリアムズ（秦邦生訳）	4．発行年 2022年
2．出版社 月曜社	5．総ページ数 281
3．書名 オーウェル	

1．著者名 中井亜佐子	4．発行年 2020年
2．出版社 月曜社	5．総ページ数 299
3．書名 〈わたしたち〉の到来――英語圏モダニズムにおける歴史叙述とマニフェスト	

1．著者名 田尻芳樹・秦邦生他	4．発行年 2020年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 317
3．書名 カズオ・イシグロと日本　幽霊から戦争責任まで	

1．著者名 Fuhito Endo, Jean-Michel Rabat, Isabelle Alfandary, Anna Kornblum, David Sigler et. al	4．発行年 2019年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 265
3．書名 Knots: Post-Lacanian Psychoanalysis, Literature, and Film ed. Jean-Michel Rabate,	

1．著者名 小川公代、唐澤一友、川崎明子、桒山智成、小山太一、高桑晴子、武田将明、田中裕介、秦邦生、中井亜佐子他	4．発行年 2019年
2．出版社 三修社	5．総ページ数 408
3．書名 イギリス文学と映画	

1．著者名 高橋和久、丹治愛、秦邦生他	4．発行年 2020年
2．出版社 松柏社	5．総ページ数 515
3．書名 二〇世紀「英国」小説の展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	秦　邦生 (Shin Kunio) (00459306)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	中井　亜佐子 (Nakai Asako) (10246001)	一橋大学・大学院言語社会研究科・教授 (12613)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田尻　芳樹 (Tajiri Yoshiki) (20251746)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計7件

国際研究集会 Internatinal Workshop: "Bruno... Joyce... Lacan, three heretics: From infinite worlds to the knots of desire"	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Tokyo Modernism Research Seminar 3: "Modernists between Cosmopolitanism and Localism"	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Modernism Research Seminar 1: “Femininity, Masculinity, and Psychoanalysis”	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 Tokyo Modernism Research Seminar 2 “The Politics/Poetics of Inheritance and Commemoration: Joseph Conrad and Ezra Pound”	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 The Second Annual International Conference of the Modernist Studies in Asia Network (MSIA) “Modernism and Multiple Temporalities"	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 International workshop: Deviating with and from Freud: Discussions with George Makari	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 On Revolution in Mind	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	The University of Pennsylvania			
シンガポール	Nanyang Technological University			
中国	Fudan University			
中国	Chinese University of Hong Kong			